おねショタ！

弟のお世話はお姉ちゃんにお任せ

NEHIOTA

OTOTONO OSEWAHA ONEECHAN NI OMAKASE

2D DREAM POCKET NOVELS SERIES

【小説】089タロー　挿絵：空維深夜

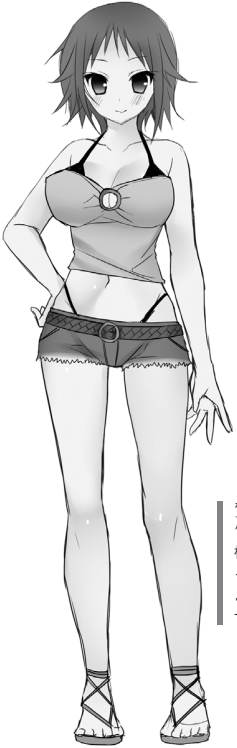
立ち読み版

桂葉 百合菜（かつらば ゆりな）

桂葉姉妹の長女で一家の長。弟が大好きで甘やかすのが何よりもの幸せ。おっとり天然系で包容力に溢れている。

桂葉 美波（かつらば みなみ）

桂葉家の次女で、クールな超絶美少女として学園でも男女から人気の姉。弟を弄るのが好きでエッチな悪戯をすることも。



桂葉 真子（かつらば まこ）

桂葉家の三女で、生真面目なボーイッシュ姉。亮太を強い男に育てようと厳しくあたるが、内心では甘やかしたいと思っている。

桂葉 亮太（かつらば りょうた）

甘やかしまくってくる姉たちにうんざりして自立したいと思っている末弟。

序章　弟が可愛くなっちゃった♥　007
一章　お姉ちゃんたちがお世話してあげる♪　026
二章　お姉ちゃんが癒やしてあげる♥　057
三章　おねーちゃんがいじってあげる♪　086
四章　姉ちゃんが励ましてあげる★　125
五章　お姉ちゃんたちが構ってあげちゃう♪　166
六章　お姉ちゃんたちがお嫁さんになってあげる♥♥♥　202

「――ぁ……あれ。ぼく、寝ちゃったのか……」

亮太は寝ぼけ眼をこすって、ベッドの上で半身を起こす。

時計を見ると、時刻はすでに深夜だった。どうやらあの後、結局眠ってしまったらしい。

そして、はたと気がつく。

（そういえばお風呂、入ってない。汗かいてべたべたする……）

夏なだけに気温は高く、寝汗もあって不快感が身を覆っている。服は破れたため身体は裸だが、頭にはクマのフードが残って中もかなり蒸していた。

意識するとどうにも気になって、亮太は仕方なく風呂に入ることにした。

だが。着替えを手に廊下を歩くと、暗さに怯えを感じてしまった。

（こんなことくらいでこわいなんて。ぼく、ほんとに心まで■になっていくのかな……）

大人でも暗闇は怖れるものだが、こうまで怯えたのは何年も前の話だった。

■な我が身を恨めしく思いつつ、亮太は何とか風呂場にたどり着く。

幸いまだ湯は冷めておらず、浴室の明るさにほっとしながらまずは頭を洗いにかかる。

ところが今度は別の苦労が待っていた。

「ううっ、シャンプーが目に……しみるぅ。なんで、前はぜんぜん平気だったのに……」

これも■ゆえだろうか。たかだか髪を洗うだけでも難儀してしまっていた。

無論、目を閉じればいいだけである。泡が顔に垂れないようにするのもよい。そんなことは分かっているのに思うように実行できず、目を閉じること自体が怖くてできなかった。

（こんなことくらい、こんなことくらい一人でだって……！）
追い返した手前、今さら姉たちに頼るのも気が引ける。
姉ちゃんたち、怒ってるかな……そんなことを考えつつ悪戦苦闘していたときだった。
「――亮くん？　入ってるの、亮くんよね？」
「――えっ？　ゆ、百合姉ちゃん？」
脱衣所の戸が開く音がして、耳に慣れた柔和な声が聞こえてきた。
「お風呂に入ってるみたいだったから来てみたの。あれからどう？　なんともない？」
「う、うん。平気だよ」
「そう、よかった」
普段ならすでにみんな寝ている時間だ。けれど百合菜は起きていてくれたようだった。
それだけではない。見ればドアのすりガラスには、衣服を脱いでいる人影が。
「亮くん、一人でお風呂、大変でしょ？　お姉ちゃんが洗ってあげるね」
「えっ？　い、いいよそんな、一人でやれるから！」
「……亮くんは、お姉ちゃんと一緒に入るの、いや？」
「そんな、そんなわけ……ない、けど……」
シュンとした声で聞かれると、とても強くは拒絶できなかった。本音では姉の助けを欲していたのだ、彼女の登場に安堵している自分すらいた。
それに何より、すりガラス越しに見える姿にどうしても胸が高鳴ってしまう。

（百合姉ちゃんが服ぬいでる、横からだとあんなにおっぱいとお尻が膨らんでみえて……）
ショーツを足から抜く動作だけで豊かな膨らみが確かに揺れた。背中を伸ばせばヒップの形も浮いて見えて、程よく締まった腰のくびれがより豊満さを強調していた。
沁みる目のことも忘れてしまって思わずじっと見入っていると、姉はさっとバスタオルを巻き、髪をアップにまとめてからドアを開いた。
「じゃあ、入っちゃうね。あ、そのままにしてて、お姉ちゃんが洗ってあげるから」
「あわ、あわわわ……！」
白いバスタオル姿の百合菜は、やはり魅力的で目のやり場に困った。
はっきり言ってバスタオルは小さかった。否、二つのおっぱいが大きすぎるため、そちらに面積を取られすぎるのだ。おかげで丈が足りなくなり、肉感的な太腿はおろかデルタゾーンまで見えてしまいそうだった。
しかも軽くしゃがんだだけで、大きな胸がたゆんと揺れて結び目が緩みそうになる。
「じゃあ亮くん、椅子に座ってむこう向いててね」
弟の赤面を知ってか知らずか、百合菜はニコニコと笑いながら背後に座ってシャンプーの続きをしてくれる。
「暑いからいっぱい汗かいちゃったね。しっかり洗っておこうね？」
「ううっ、百合姉ちゃん、ぼく、その……は、恥ずかしい、よぉ……」
「どうして？　昔はよく一緒に入ったじゃない。お姉ちゃん、とっても楽しかったよ」

確かに昔はよく姉の世話になったものだ。姉弟四人で入浴したことも一度や二度ではない。しかしその頃の姉は今の自分と同じか、それ以上に[redacted]だった。

そして今の姉は、男なら誰でもむしゃぶりつきたくなるような身体つきをしている。顔立ちもやや童顔で可愛らしく、世話好きな性格は男子生徒からのウケも抜群だ。

そんな姉に、夕方にはペニスをしごいてもらったのだ。そのうえ一緒にお風呂となれば意識せずにいられるはずがない。

「うふふ、亮くんの髪、ふわふわでとっても綺麗。はい、次は背中ね」

百合菜は丁寧に髪を洗い流し、今度は泡立てたスポンジを背中に当ててくる。

と、不意に彼女は声のトーンを少し落とした。

「……ごめんね亮くん。お姉ちゃんたち、亮くんが可愛いから、ついつい浮かれちゃって」

「……え？　百合姉ちゃん……？」

「悪気はないの。真子も美波も、ほんとは亮くんのこと、すごく大事で心配してるから」

丁寧にスポンジを這わせながら、百合菜は静かに言う。

「だから、一人でがんばろうなんて思わないで。もっといっぱい、お姉ちゃんを頼って」

亮太は察した。きっと百合菜は、自分を心配して今まで寝ずに起きていたのだ。何かあればすぐに駆けつけられるように。だからこそ入浴にも気づいたのだろう。

そして、頼ってもらえなかったことを、寂しく感じたに違いない。

さらに彼女は、不安からくる弟の苛立ちも、ちゃんと察してくれていた。

「大丈夫。きっと、必ず元どおりに戻れるから」
「あ……姉ちゃん……」
「それにもし――万が一、亮くんがずっとこのままでも……お姉ちゃんがついてるから。何年でも、何十年でも、ずっとずっと一緒だから……ね？」
後ろからそっと頭を抱いて百合菜は優しく微笑んでくれる。胸元の弟を見下ろす瞳は、溢れんばかりの慈愛に満ちてサファイア色に煌めいていた。
「姉ちゃん……ぼく、ぼくこそ、ごめん。ばかなんていって。拗ねちゃったりして」
亮太もまた、密かに気にしていたことを謝った。
頼るべきときに頼らないことこそ、優しい姉を悲しませてしまうのだ。そのことに気づいた彼は、もっと素直になろうと決める。
「ぼく……姉ちゃんたちに当たっちゃったんだ。恥ずかしかったのはほんとだけど、こんな身体になっちゃって、すごく不安で、なんにもできないことが情けなくって……」
「亮くん……いいの、亮くんはなにも悪くないから」
「ううん、ほんとにごめん。美波姉ちゃんと真子姉ちゃんにもちゃんと謝る。だから……」
――ぼくのこと、嫌いにならないで。
そう囁いた途端、百合菜は瞳をウルッとさせて、弟の身体をくるりと回し、正面から抱き締めてくれた。
「嫌いになんて……！　安心して。お姉ちゃんはいつまでも亮くんのこと、大好きだから」

「百合姉ちゃん……うんっ、ぼくもっ」
亮太も短くなった両手で抱き返した。
心から嬉しかった。何があっても彼女は自分を受け止めてくれるという安心感を得たのだ。不安でいっぱいだった胸中に、暖かな気持ちが満ちていくのが分かった。
だからだろうか。何だか無性に恋しさが募って、このまま甘えてしまいたくなる。
(ああ、百合姉ちゃんのおっぱい、やっぱりあったかい……ふかふかしてきもちいい……)
豊かな胸に頬ずりしていると、それだけで不安など霧散していった。もっと抱かれたい。もっと触りたい。そんな甘えた気持ちと共に、不思議なときめきが胸に湧き上がってくる。
ふと気がつくと、目の前のタオルが緩んで解けそうになっていた。白い乳肉が半ばほど溢れ、ほんのわずかに薄い桃色が見えていた。
(ゆっ、百合姉ちゃんの、にゅ、乳輪っ……!)
途端に心臓がドキンと跳ね、股間が一気に熱を持つ。
「ぁ……亮くん。おちんちん、また……」
太腿に当たる尖った感触に、百合菜は小さく身動ぎする。
「あらあら〜……うふふ、また、おっきしちゃったね。お姉ちゃんのこと……好き?」
「……うん。好き。百合姉ちゃん、きれいで優しいから……」
恥じらいつつも素直に言うと、彼女は頬を淡く染めてほころばせた。
「お姉ちゃん嬉しい。じゃあ……気持ちよくしてあげるね? このままじゃ辛いから」

そう言って彼女は、[redacted]な身体の可愛い弟を、横向きにして膝に座らせた。
そして左手で背中を支えつつ、右手の指を勃起ペニスに絡ませてしごく。
「あっ、百合姉ちゃん、また、おちんちんを……」
「いいの。お姉ちゃんが、キレイキレイしてあげるから……」
百合菜の笑顔は慈愛に満ちて美しかった。穏やかで優しく、まるで無垢な天使のようだ。
けれどその指は、以前よりも艶めかしく動き、弱いポイントを的確に刺激してくる。
「ああっ！　そ、そこ、感じるぅ……！」
再び優しく皮を剥かれてエラの裏を指先で擦られると、ペニスに激しい媚電が走って亮太の腰がバウンドをする。
「うふふっ、ここが気持ちいいのね？　大丈夫。美波と真子はもう寝ちゃってるし、いっぱい声だして平気だからね？」
ほんの少しだけイタズラっぽく笑って、百合菜は親指でなおもくすぐる。汚れを優しくこそぎ取るような絶妙な力加減に、肉棒はびくびくと悶え震え、早くも鈴割れからツユをこぼし始めていた。
「はぁ、はぁ、姉ちゃん、ぼく、ぼく……！」
腰にまで甘い電流が広がり亮太が震えて縋りつく。すると姉の胸元のタオルが、きゅっとずれてシワを作った。
（ね、姉ちゃん、おっぱい……見えそう……）

緩んだ胸元から谷間が露出して、もう少しですべてが見えてしまいそうだった。
思わず物欲しげな目で見上げると、姉の青いつぶらな瞳が、ニコッと優しく細まる。
「……いいよ。お姉ちゃんのおっぱい、見せて……あげるね」
細い左手が胸元に伸び、タオルの端にそっと触れた。
その指が、しゅるりと布を解いて開くと、
——ぷるるんっ、たゆるるんっ。
（っっ！　ゆっ、百合姉ちゃんの、お、おっきな、おっぱいっ！）
あらわになった揺れる膨らみに、弟の視線は釘づけになった。
初めて見た姉の乳房は、想像通り、いやそれ以上に大きかった。そのサイズは間違いなくHカップはあり、少しも垂れた印象のない、大玉スイカ並みの見事な美爆乳だった。
しかもミルク色の乳肉は、見るからに柔らかくて呼吸するだけで揺れている。薄桜色の小さな乳首も何だかとても美味しそうで、まるで丸々と実った食べごろ果実のようだった。
その魅惑的な特大の膨らみに、優しい姉は頭を抱いて寄せてくれる。
「……いいよ亮くん。お姉ちゃんのおっぱい、吸って？」
恥ずかしさは感じているのか、白い頬は薄い朱色に染まっている。つやを帯びた甘い微笑がまた男心にグッときて、亮太は爆乳に思い切りむしゃぶりついてしまった。
「っっ！　百合姉ちゃんっ！　ちゅうっ、ちゅっ～～！」
「あぁんっ！　りょ、亮くぅん、はぁあ……！」

途端に百合菜は小さく震え、目を閉じ眉根を軽く寄せる。
「亮くん、あっ、先っぽいっぱいちゅっちゅして……はぁあ、赤ちゃんみたいにぃ……」
「ちゅうぅぅっ……はぁ、百合姉ちゃん、乳首、おいしい。なんだか甘い……」
「はぁ、はぁ、ほんと？　よかった、亮くんに喜んでもらえて……はぁあっ」
――ちゅううっ、むにゅっむにゅっ、たむんったむんっ。
舌に広がる不思議な甘みに亮太は大いに興奮し、夢中で谷間に頬ずりしながら二つの爆乳を味わいまくった。
（ああすごい、柔らかい、あったかくてきもちいいっ！）
甘えるように乳首を含み、舌で舐め、両手を伸ばして乳肉を揉む。量感タップリの美爆乳は見た目以上に柔らかくて、まるでつきたてのお餅のように指が埋もれて形が変わった。
生まれて初めての女性の生のおっぱいの感触。それは想像以上に心地よくて、両手の指や唇はもちろん、味覚すらもがウットリと蕩けてしまいそうなほどだった。
それだけではない。優しげだった姉の表情には、次第に甘い官能の色が浮かび始める。
「はぁ、はぁ、亮、くぅん……お姉ちゃんのおっぱい、いっぱい吸って……はぁあ、お姉ちゃんおっぱいが、な、なんだか、熱く……」
薄く目を開け眉根を寄せて、百合菜は弟を見下ろしている。かすかに恥じらいの残る眼差しは、けれどキラキラと潤み始め、上気によって色づく頬も色っぽさが増している。
まるで授乳しながら感じているような悩ましげな姉の姿に、弟少年はますます興奮して

乳輪をむちゅうっ、と口に含む。
「あぁあんっ！　亮くん、だめ。それ……感じちゃう……！」
百合菜はおとがいをぴくんと跳ねさせ、はっきりと快感を口にした。年上らしからぬ愛らしい声には、鼻にかかった甘い湿り気が交じり始めていた。
（百合姉ちゃん、おっぱい……敏感なんだ……）
大きな胸は感度が悪いと小耳に挟んだことがあるが、姉の爆乳はそんなことはなく心地よさげに媚震えている。むしろ感度は抜群のようで、吸えば吸うほど吐息は弾み、乳首はさらなる口づけを求めてぷっくりと硬化してきていた。
「はぁ、はぁ……うふふ、亮くんったら、お姉ちゃんのおっぱい大好きなのね。とっても美味しそうに吸ってくれて」
なおも乳首に吸いつく弟を、姉はより深く抱き寄せた。
嬉しそうに微笑むと、官能に止まっていた手淫を再開してくる。
「お礼におちんちん、いっぱい気持ちよくしてあげるね……」
「姉ちゃん、百合姉ちゃんっ、ああっ！」
今まで以上の勃起痺れに亮太は再び腰を震わせた。姉の手つきは相変わらず緩やかで優しいが、前より格段に動きがスムーズで刺激の度合いもまた強かったのだ。
しかも今度はソープを手に取り、たっぷりと泡立ててから小刻みにこすってくる。
「はぁ、はぁ、おちんちん泡まみれにぃ……姉ちゃんだめ、すごくよくって、ぼく……！」

「ちゅ、ちゅっ――真子姉ちゃん、おツユいっぱいでてきた。甘い……吸ってもいい？」
「えっ？　あっ、だめ、吸うなんてそんな――んやああんっっ！」
――びくっ、びくびくん！
少年の唇が奥から蜜を吸い出した瞬間、彼女の肢体はグンッ、と大きく仰け反っていた。
（真子姉ちゃんが――い、イってくれた！　ぼくの舌で！）
未熟な少年でもそれと分かった。肢体はブリッジを描いたまま、電流が流れたように痙攣している。弟の頭を押さえた両手もぷるぷると細かく打ち震え、薄いピンクの粘膜からは蜜がどっと溢れ出てきた。
やがて肢体がクタリと落ちると、彼女は呼吸を荒らげて言う。
「はぁはぁ……もぅ、いいから……十分っ、気持ちよくなったから……」
まるで、これ以上焦らさないで、とでも言いたそうに、涙の浮いた目で見つめてくる。
「だから……き、きて。姉ちゃんの、ナカに……」
「真子姉ちゃん……うん。ぼくも、すごく入れたい……！」
絶頂の余韻もあらわな眼差しは、普段の強気がうそのように艶めかしく蕩けている。強い快楽に怯えるような可憐すぎる姉の顔を見て、亮太は激しく燃え上がってしまっていた。
「姉ちゃん……い、いい？」
「うん……いいぞ、リョウ……」
快楽がそうさせたのか、すでに迷いの色は見られなかった。むしろ眼差しには、愛しい

牡と交わりたいという女としての期待感さえある。

その甘い眼差しと魅惑の肢体に誘われる心地で、亮太はゆっくりと腰を重ね――

「んんっ、はぁあリョウっ～～あっ、あああっ！」

――ぬぷっ、ずぷぷぷっ！

湿った粘膜を押し広げながら肉棒が一気に奥まで入った。途端に彼女は声をあげ、結合部からは一筋の鮮血が伝い落ちる。

「ああっ、真子姉ちゃんのおま○こっ――き、きもちいい。すごい、締まるっ……！」

空手で鍛えているためだろうか、真子の中は非常に窮屈で締まりがよかった。その感触は食い締めるという表現が似合うほどで、肉棒全体が強烈な圧迫感に包まれた。

けれど膣肉は大量の蜜で柔らかくなっていて、辛さや痛みなど少しもない。少しザラつくヒダとツブも、グミのような弾力があってぷるぷるしていて気持ちよかった。

そして――

「かはぁ――！　す、すごっ、これいいっ……奥まで入って、き、気持ち、いい……？」

軽く背を浮かせる真子は、初めて受け入れた弟の感触に唇をわななかせ戸惑っていた。

「はぁ、はぁ、やだ、こんなっ……ナカで、びくん、びくん、って……ぁあ、熱い、おま○こ、熱い……溶けちゃいそう……♥」

トロンとした半目になって、彼女は喉を震わせていた。潤んだ瞳には苦悶の色などどこにもなく、むしろ陶酔の色が濃い。小鼻も小さくヒクついていて、異様に艶めかしかった。

（真子姉ちゃん、ひょっとして、もう感じちゃってる？）
少なくとも苦しんでいる様子ではない。初めての感覚に困惑しているという表情である。
試しに少しだけ動いてみると、真子はびっくりしたように腰を跳ねさせた。
「きゃん⁉　ああだめリョウ、もうちょっと待って、すぐに動くと、わ、わたしっ……」
「でも姉ちゃん、きもちよくない？　なんだかすごくそう見えるんだけど」
「ばっ、バカっ！　そんな、コト……」
言葉はすぐに尻すぼみになり濡れた瞳が横を向く。頬はますます色味を深め、耳まで真っ赤になってしまった。
その仕草が可愛かったし、正直を言えば早くおま○こを味わいたかった。恥じらう姉に甘える心地で、亮太はゆっくりと腰を振り始めた。
「ごめん姉ちゃん、ぼく、動きたい」
「えっ、あ、だめリョウ――んあっ⁉　きゃあんっ！」
――じゅぷっ。じゅぷっ、じゅぷっ、くちゅっ、くちゅっ……
肉棒がゆっくりとスライドをして、濡れた膣肉をこすり始めた。するとたちまち膣洞全体が、きゅんっ、きゅんっ、と収縮をしてサオを強く締めつけてくる。
同時に彼女は、驚いたように腰を跳ねさせ、イヤイヤと首を振った。
「きゃうん！　だめっ、動くな、はあおま○こ擦れてぇっ～～ああだめっ、あふぅんっ！」
相当に敏感な膣肉なのか、ほんの少しこすっただけでも真子は艶めかしい嬌声をあげた。

その声には早くも強い湿り気が混じり、白い肩がひくひく震えてしまっていた。
「はぁはぁっ、こんな、こんなのって……ああだめ、初めてなのに、どうしてっ、わたしのおま〇こ、こんなに感じてぇっ……！」
「真子姉ちゃん、やっぱりきもちいいんだ？　うれしい、ぼくうれしいよ！」
何とも艶めかしい彼女の仕草に亮太は心が躍ってしまった。
もう間違いない。破瓜直後なのに姉は早くも感じてくれている。十分に濡れたおかげだろうが、こうも乱れるのはきっと相性が抜群だからに違いない。
その証拠に、抽送を深く速くすると、姉はついに腰をくねらせ堪らず身悶え始めた。
「やぁああんっ！　はあだめっ、速くしちゃ、おま〇こ焼けるっ、しっ、痺れちゃううっ！」
「ごめん姉ちゃん、ぼくもうとまらないよぉ！」
「だめぇそんなっ、あっ、抱きついちゃ、おっぱいすりすりしちゃだめえっ！」
おっぱいまで敏感なのか、谷間で頬ずりされることすら彼女は感じてしまっていた。その反応に堪らなくなって弟が乳肉にぷちゅりと吸いつくと、姉は大きく背筋を仰け反らせ、
「んああああっだめえええっ！　あっあっ痺れるぅ、痺れっ、イクううっ！」
――ぷしゃあああっ！
何と濡れた結合部から、透明な飛沫を散らしていた。
「はあっはあっはあっ！　や、やだっ、こんな、わたしっ、感じすぎちゃってぇ――！」
どうやら早くも絶頂に達し、潮を噴いてしまったようだった。

「姉ちゃん、すごい――敏感なんだね。ぼく、どきどきがとまらないよ」
口に手を当て惑う姿は、可愛らしくもあり官能的でもある。文字通り自身の感度のよさに困惑しきっている様子だった。
気づけば濡れた瞳からは、快楽の涙までこぼれてしまっている。その可憐さと初々しさが、少年の愛欲をますます高める。
「真子姉ちゃん、うれしい。ぼくでイってくれて」
びくびくと震える彼女の胸に、亮太は甘えるように抱きついた。
「姉ちゃん、ぼく……もっと姉ちゃんをイカせたい。きもちよくできる男になりたい」
「っ……バカっ。もう……イカせたクセに」
動きを止めた弟の頭を、姉は震える手で撫でた。
呼吸を弾ませたまま、赤い顔に苦笑を浮かべる。
「……いいぞ。イカせても。今は、今だけは……リョウの、カノジョだから……♥」
「姉ちゃん……」
今の姉は、いつにも増して優しく、甘く、慈愛に満ち溢れていた。弟への愛情がそうさせるのか、すべてを許す包容力のようなものがあった。
二人はしばし見つめ合って、心の篭ったキスをした。そして、照れ臭そうに微笑む彼女の頷きを得てから、
「姉ちゃん、真子姉ちゃんっ！」

「あふぅんんっ！　はあリョウっ、あんあんあんっ♥♥」
——じゅっぷじゅっぷじゅっぷじゅっぷぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅっ！
全身全霊で彼女を抱こうと、亮太は激しく腰を振った。
「あんっ、あひっ、んはああんっ！　はあリョウっ、感じっ、感じちゃううっ！　イったばかりなのに、姉ちゃんっ、すぐにいっ！」
「はぁ姉ちゃん、きもちいいよぉ、おま○こきゅんきゅん締まって、おちんちん溶けるぅ！」
初めての快楽に目覚めたためか、姉の膣肉はますます蕩けてしまっていた。グミのようなぷるぷるの粒ヒダはいよいよ愛情の蠕動（ぜんどう）を始め、しきりに引っかく熱い肉棒をしっかりと食い締めなめらかにしごく。窮屈な分だけ刺激は強く、激しい快楽に肉棒はみるみるのたうっていった。
さらに少年は、元気よく揺れる豊満なバスト、その際どい水着にも指をかける。
「姉ちゃんっ、お、おっぱいも見たいっ！　いいよね？」
「ああそんなっ、もうほとんど見えてるのにぃ——ああっ！」
——ぷるっ、ぷるるるるんっ！
紐のような水着をずらすと、Fカップはある豊満な乳房が弾けるように飛び出てきた。
それはまさにロケットのようなおっぱいだった。グンと突き出た丸みはお椀型で、瑞々しさと張りがある。先端の突起は鮮やかなばら色で、まるで新鮮なチェリーのようだった。
そのチェリーを夢中で口内に頬張ると、少年はなおも激しく腰を振りたてていく。

「あはああだめえっ！　すっ、吸いながらなんて、はあ揉みながらなんてっ、わたし感じちゃう、姉ちゃんまたイっちゃううっ！」
「ちゅううっ――姉ちゃんの乳首、甘い、おいしいっ、ああ姉ちゃん、姉ちゃんっ！」
もはや亮太は高まる愛欲をこらえなかった。そう、今は目いっぱい姉に甘えたい。敏感な肢体を全力で愛し、すべてを受け止めてくれる彼女に漲る情熱を伝えたい。それだけを思い、[redacted]な身体を懸命に動かしていく。
そして真子もまた、[redacted]い弟の求愛行為にどうしようもなくよがっていった。
「はあっはあっ、すごい、おっぱいっ、感じちゃううっ！　おちんちんもすごいっ、ナカでびくんびくんして、ああおま○こかき混ぜられるぅ……♥♥」
乳首を吸われつつ突かれる肢体は、すでに全身がばら色に染まっていくつもの汗珠を浮かべている。乳首は完全に勃起しきって口づけされるたびぴくぴくと震えた。しなやかなくびれも何度も捩れ、女としての愛でられる悦びを隠そうとはしなかった。
さらにラビアは、その入り口をリズミカルに締めサオの根元まで刺激してくる。泡立つほどに漏れた愛蜜はトロトロとお尻を伝い流れ、砂浜にいくつもの跡を作っていた。
「はぁはぁはあっ、姉ちゃん、ぼくっ、もうでちゃう……！」
乳吸いをやめて身を起こすと、すっかり蕩けた表情の姉と目が合う。涙をこぼす艶めかしい眼差しに、少年は熱く訴えた。
「中に、中にだしてもいいっ？」

うで、軽く含んで舐めるだけでも突起は硬くしこってきた。
「んぁっ、はぁ……ふふ、ほんと甘えん坊ね。それともおっぱい星人？」
「わかんない。でも、姉ちゃんのおっぱいは大好き」
「あん、もう、可愛いことといってくれちゃって」
美波は照れ臭そうに微笑むと、たわわな乳肉を持ち上げ、顔いっぱいに押しつけてきた。
それを見た百合菜と真子も、負けじとおっぱいを押しつけてくる。
「あぁん、亮くん、お姉ちゃんのおっぱいももっとぉ。はい、乳首いっぱい召し上がれ」
「リョウ、姉ちゃんのも……もっと、吸っていいんだぞ。揉んだって、なんなら噛んじゃったって……」
「はぁあ姉ちゃんっ、おっぱいが、いっぱいにぃ……！」
亮太はまたしても豊満なおっぱいに揉みくちゃにされていた。
百合菜の柔乳が頬を埋め尽くしたぷたぷと刺激したかと思えば、真子のロケットおっぱいが割りこみ可愛い突起が鼻先をくすぐる。かと思えば、今度は美波のむちむちおっぱいが重なるように乳肉を乗せてくる。子供な弟の小振りな頭は、四方どころか頭上さえをも乳肉で埋め尽くされてしまった。
しかしそれがまた、少年にとっては恍惚だった。大好きな姉たちがとことん甘やかし、魅惑のおっぱいを余すところなく感じさせてくれる。悦びと興奮が入り混じる中、彼は夢中で突起をついばみ、代わる代わる揉みしだかずにはいられなかった。

「ちゅぅっ、ちゅぱっ……はぁはぁ、甘い、おいしい、ああぼく、どきどきしてぇ……！」
薄く浮いてきた汗のにおいも堪らなく愛欲を刺激した。ミルクのような百合菜のにおい、ミントに似た美波の香り、ミカンを思わせる甘酸っぱい真子の体臭、どれも最高で、鼻腔の神経まで蕩けてくるようだ。
そして百合菜の右の掌が、短パンを盛り上げる股間のテントにそっと重ねられる。
「はぁぁ……うふふ。亮くん、おちんちんもう、こんなにおっきしてるね。窮屈そうだから、ぬぎぬぎしよっか？」
彼女は乳首を口に含ませつつ、器用に短パンを足から抜いて弟の股間を露出させた。
「わぁお。もうこんなに……っていうか、一丁前に剥けちゃってるじゃない」
「ほ、ほんとだ、ちょっと前まで皮かぶってたのに」
覗きこんだ美波と真子が、揃って少し驚いていた。
姉たちの手に剥かれてきたからか、あるいはクセがついてきたのか。亮太の勃起したペニスは、ほぼ完全に包皮が剥け切っていた。
「ふ～む、気のせいか、ちょっとだけ大きくなってるような……ま、いっか。少しは男の子らしくなったってことで」
乳房を離してしゃがみこむと、美波は弟を見上げながら裏筋をツゥ……と指でなぞる。
「あっ、美波姉ちゃん、だめ……おちんちん、感じちゃう……」
「敏感なのは変わらないのね。でも、感じやすいおちんちん、おねーちゃん好きよ♪」

小さく笑う彼女の眼差しは、すでに薄く湿り気を帯びて期待の色を浮かせていた。このペニスに貫かれる瞬間を待ちわびているに違いなかった。
甘い吐息をふぅっと吹きかけ、姉はイタズラっぽく誘う。
「どうしてほしい？　おねーちゃん、ううん、恋人に」
「うぅ……な、なめてもらいたい、です。姉ちゃんのお口、とってもきもちいいから」
「ふふっ、いいわよ。素直でかわい～カレシくんには……おまけもつけちゃう」
そう言って美波は、両足の間に身体を入れて、豊満なおっぱいをペニスに寄せた。
そして谷間で挟みこむと、ゆっくりと上下にしごきながら突き出たカリを舌で舐める。
「ああ姉ちゃん、それ、きもちいいよぉ……！」
「んっ、れろっ……ふふっ、でしょ？　おねーちゃんのパイズリフェラは世界一だもの」
実際、彼女の淫戯は素晴らしく気持ちよかった。弾力タップリの乳肉で擦られるとサオはみるみる快く痺れ、濡れた舌で舐められるたびにカリは震えてカサを広げた。
それだけではない。それを見た百合菜と真子までが、腰の左右に陣取ってくる。
「うふふ。亮くん、お姉ちゃんのおっぱいも、いっぱいおちんちんで感じてね」
百合菜は甘く微笑むと、両手でおっぱいを持ち上げ、美波のおっぱいに重ねるようにカリをもっちりと包みこんだ。
「リョウ、姉ちゃんのおっぱいも……感じてくれ。リョウの悦ぶ顔、見たいから……」
恥ずかしそうにモジモジしつつ、真子もまたおっぱいを寄せ、美波のおっぱいと張り合

うようにサオをむにゅむにゅと押してくる。
「もう、しょうがないわね。いいわ、それじゃトリプルパイズリでイカせてあげる」
美波は一瞬だけ不満げな顔をしたが、すぐに左右に目配せした。すると百合菜と真子も笑って頷き、揃って乳房を動かしてきた。
「ああそんな、おちんちんが、姉ちゃんたちのおっぱいに埋もれてぇ……！」
亮太はソファの上で、両足を大きく開いたまま身悶えした。
初めて味わうトリプルパイズリは、これまた何とも刺激的だった。もちもちとした百合菜の柔乳、むっちりとした美波の張乳、汗の量がとても多いねっとりと吸いつく真子の美乳、それらがまとめて絡み合って肉棒を押し包んでくる。三者三様の乳肉の感触が複雑な刺激となって纏わりつき、まるで勃起神経が心地よく翻弄されるかのようだった。
それだけで十分堪らなかったが、快楽はまだ止まらない。姉たちは揃って覗きこみ、ほとんど埋もれたカリの先っぽに舌をぬるぬると這わせてきたのだ。
「んちゅっ、くちゅっ……うふふ、亮くん、気持ちいい？　あん、おちんちんびくんびくんしてくれてる♥」
「ふふっ、もうおツユ出ちゃってるわね。いやらしいおちんちん。ほら、おねーちゃんが啜ってあげる♪」
「じゅるっ、くちゅるくちゅる……はぁあリョウっ、ニガイお汁こんなに出して……すごい、姉ちゃんっ、頭くらくらするぅ……！」

弟の反応に興奮するのか、姉たちはしきりにカリと鈴口を舐めてきた。唾液たっぷりの熱い舌が弱い粘膜を這いずるたびに、腰が跳ねてしまうほどの強い甘美感が襲ってくる。

さらに真子においては、いまだ躊躇いを残すというのに人一倍興奮しているようだった。

「ちゅるるっ、ちゅうぅ――はあぁ、美味しい、リョウのお汁、舌にぴりぴりきて……ああだめ、姉ちゃん、おっ、おま○こが、切なくぅ……！」

恥ずかしげに目を閉じながら、彼女は小さくお尻を振った。その物欲しそうな仕草が少年の心を熱くし、睾丸に溜まった粘液を沸騰させる。

「ふふっ、タマタマがきゅってしてきたわね。出そうなのね？　いいわ、出しちゃいなさい。おねーちゃんたちにあっつい精液っ！」

そう言って美波はパイズリのピッチを上げてきた。つられるようにして百合菜と真子もピッチを上げる。

「うふふっ、亮くん、我慢しないでね。はぁ、はぁ……亮くんが気持ちいいと、お姉ちゃんも嬉しくなっちゃうのぉ……！」

「リョウっ、だ、出してぇ……あんっ、あんっ！　姉ちゃんで、姉ちゃんのお口とおっぱいで、熱いの、いっぱいぃ……！」

――たっぷたっぷぬっちゅぬっちゅむにゅむにゅにちゅにちゅっ！

六つの丸みが大きくグラインドし、サオとカリをくまなく柔肉で摩擦していく。すでにペニスは唾液でぬめり、三つの谷間に包まれながら淫らな水音まで立てている。カウパー

の溢れる細い鈴口は、姉の柔らかい三つの舌が殺到するようにくすぐっていた。
その淫靡な光景と絶え間なく続く甘強い官能に、少年は腰をヒクつかせながらぐんぐんと射精感をこみ上げさせる。
「はぁはぁ、ねっ、姉ちゃんたち、きもちいいよぉっ！　すごい、おっぱい感じるぅっ、舌感じるぅっ、でちゃう、でちゃうよぉ！」
「はぁはぁ、いいの亮くん、我慢しないでっ……花嫁さんなお姉ちゃんたちに、元気な精液いっぱいかけてぇっ！」
優しげな顔に恍惚を浮かべて百合菜はたぷたぷと柔乳を揺すった。また美波と真子も、上気した頬に汗を浮かべてサオをきゅっ、と谷間で締めつける。
「リョウっ、イってぇ、出してっ、姉ちゃんのおっぱいにぃ！」
「出しなさいっ、受け止めてあげる、お顔とおっぱいで！」
「姉ちゃんたち、あぁ――ごめんっ、だしちゃうよぉっ！」
――びゅびゅびゅうううっ！　どぴゅどぴゅどぴゅっ！
甘い台詞と官能に背を押され、亮太は高い声をあげながら姉たちの谷間で果てていた。
ここ数日、出さずにいたからか。その勢いは随分と強く、カリがほとんど埋もれているのに隙間からびちゃびちゃと飛んで散った。
おかげで姉たちの美しい顔は、見る間に白く汚れていってしまう。
「あん、亮くんいっぱいぃ……嬉しい、お姉ちゃんのおっぱいで出してくれて……」

もちろん高価な花嫁衣裳も粘液で汚れてしまう。あらわな胸元はおろか、スカートやヴェールにまで白い飛沫が降りかかる。
なのに姉たちは、嫌な顔ひとつせず、むしろ嬉々としてなおもおっぱいを柔く揺する。
「はぁ……あぁ……うふふ、いっぱいびゅっびゅできたね？　いい子いい子……ね？」
「すっごく濃いのだしちゃうのね。あん、におい嗅ぐだけで妊娠しちゃいそう」
美しい顔を並べるようにして百合菜と美波がニッコリと笑った。興奮に上気した目元には、大切な弟への深い慈愛の色があった。
「はぁ、はぁ、んぁ、リョウの、せぃえき……やだ、どうして……お、おい、し……」
一方真子は、顔中に飛び散った白い塊を、震えながら指で掬い取っていた。
「んっ……はぁあ、ニガイのに、頭ぽーっとなっちゃう……おま○こ、疼いてぇ……」
ミニのスカートに右手を忍ばせ、彼女は切なげに目を閉じ震えた。すでに発情しきっているらしく、薄く開いた唇からは甘い吐息が漏れてやまなかった。
「あらら、真子ってばもうできあがっちゃったわけ？　精液舐めて感じちゃうなんて、ほんと、いやらしい女の子なのね」
美波はイタズラっぽく笑うと、真子を絨毯の上に寝かせ、両足を開かせて弟を誘う。
「わぁお、みてみて亮太、真子ってばもうぐっしょり。ほら、白いパンツにマン筋まで浮いちゃってるじゃない」
「あっ、いや、触らないで――きゃんっ！　はうぅだめぇん！」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!